

地球主義の世界史

羽田 正

東京大学東洋文化研究所

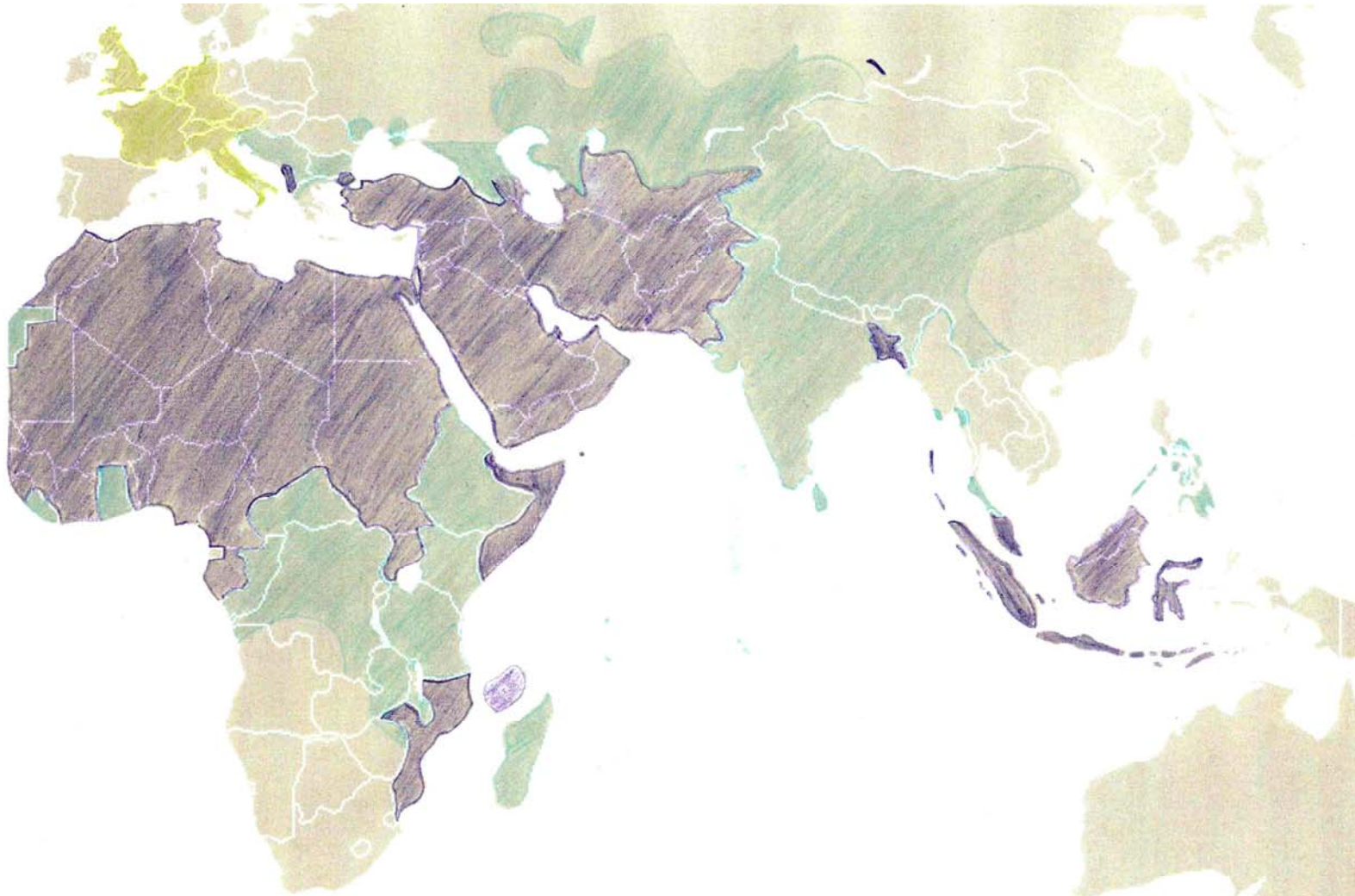
※ : このマークが付してある著作物は、第三者が有する著作物ですので、同著作物の再使用、同著作物の二次的著作物の創作等については、著作権者より直接使用許諾を得る必要があります。

今日の講義の要点

- 現代日本で使われる「イスラーム世界」という言葉とその問題点
- 近代的世界観や学問体系とその超克の必要性
- 現行の世界史認識とその問題点
- 新しい世界史への道

朝日社説が語る「イスラーム世界」

- イスラーム世界の人口は現在、約13億だ。
- イスラーム世界では今、反米意識が広がっている。イラクやアフガニスタンへの攻撃に対する反発からだ。逆に、欧米では9・11テロ以来、イスラーム脅威論が強まっている。
- 日本の資産は、中東・イスラーム世界が日本に抱く親近感と好意である。
- 日本がイラク開戦を支持し、自衛隊を派遣したことで、中東・イスラーム世界の民衆に日本への不信感が広まった。対米配慮からイスラーム世界への多国籍軍に自衛隊を出すのは、人道目的であってもマイナスが大きいことを認識すべきだ。
- 社説は「イスラーム世界」をどう定義しているのだろうか？

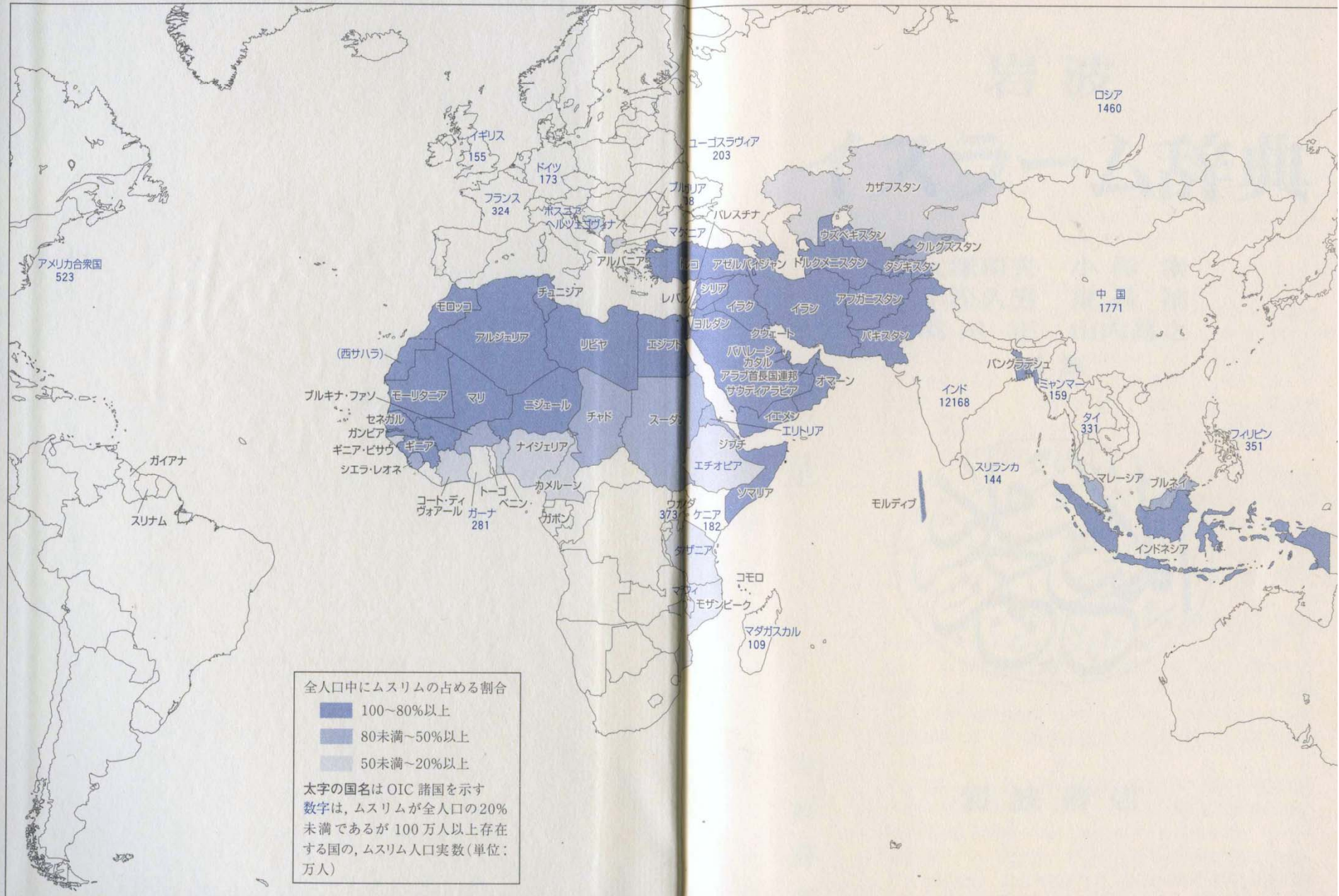


- イスラム諸国会議機構加盟国 (56ヶ国およびPLO)
- ムスリム住民の存在が社会的に大きな意味をもつ地域
- ムスリムの移動労働者などが社会的影響力をもつ地域

[現在のイスラム世界]

なお、本図に含まない南米のガイアナ(1998)、スリナム(1996)もイスラム諸国会議機構に加盟している。
※ 平凡社「新イスラム事典」を参考に作成

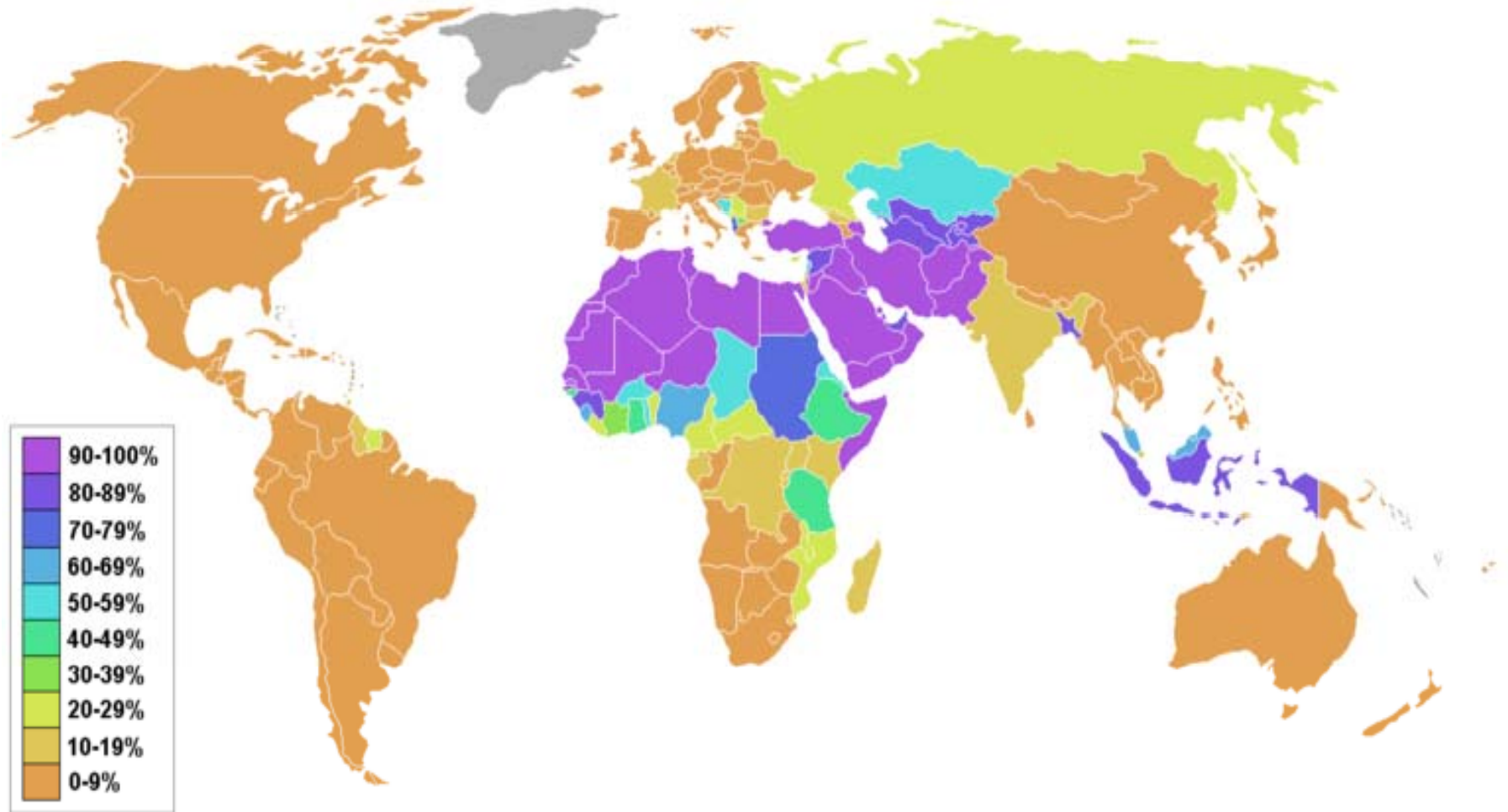
イスラーム世界全図



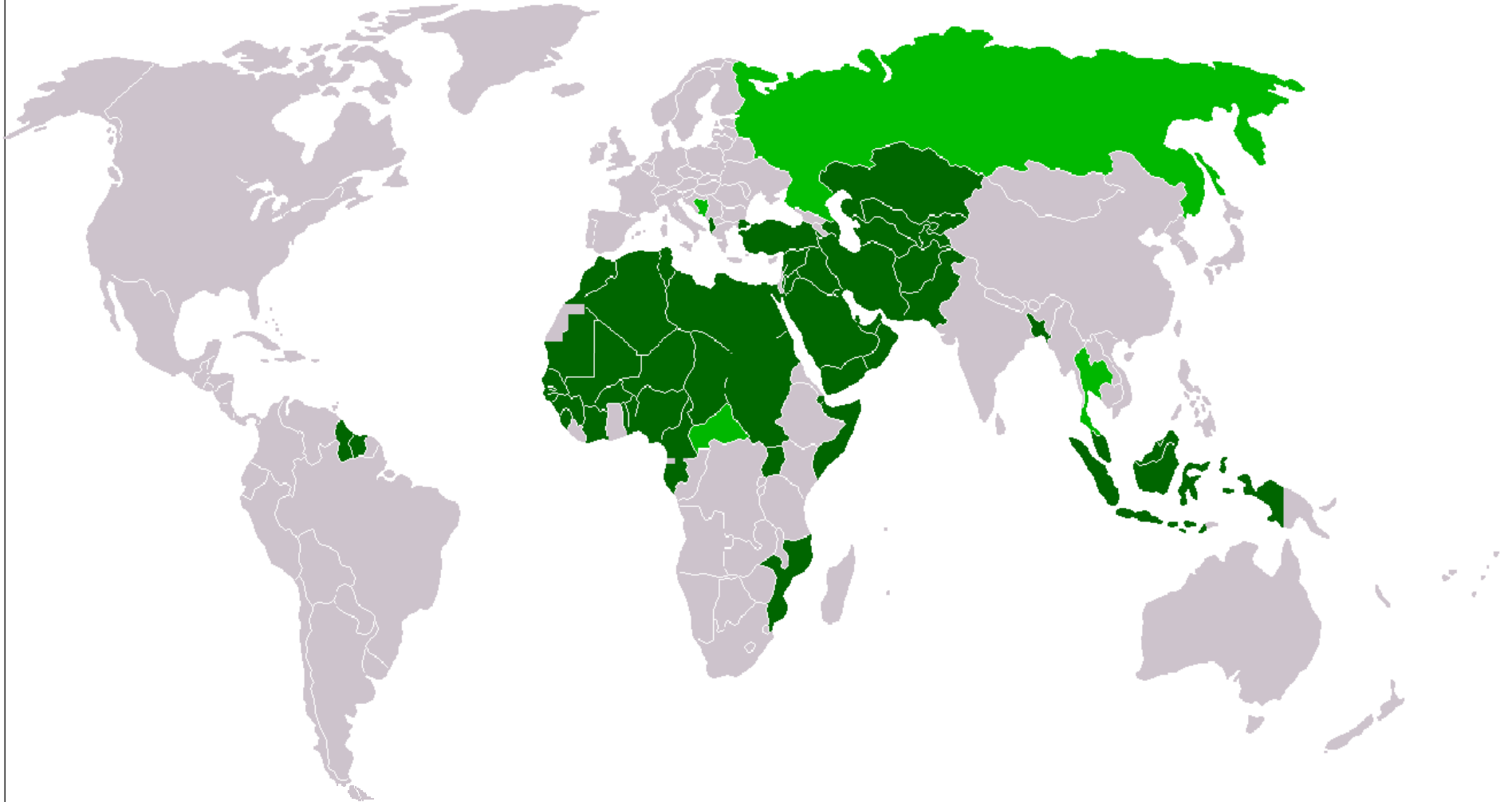
※『岩波イスラーム辞典』(岩波書店、2002年)

【ブリタニカ国際年鑑 2001】(TBS ブリタニカ年鑑, 2001年)などを参考に作

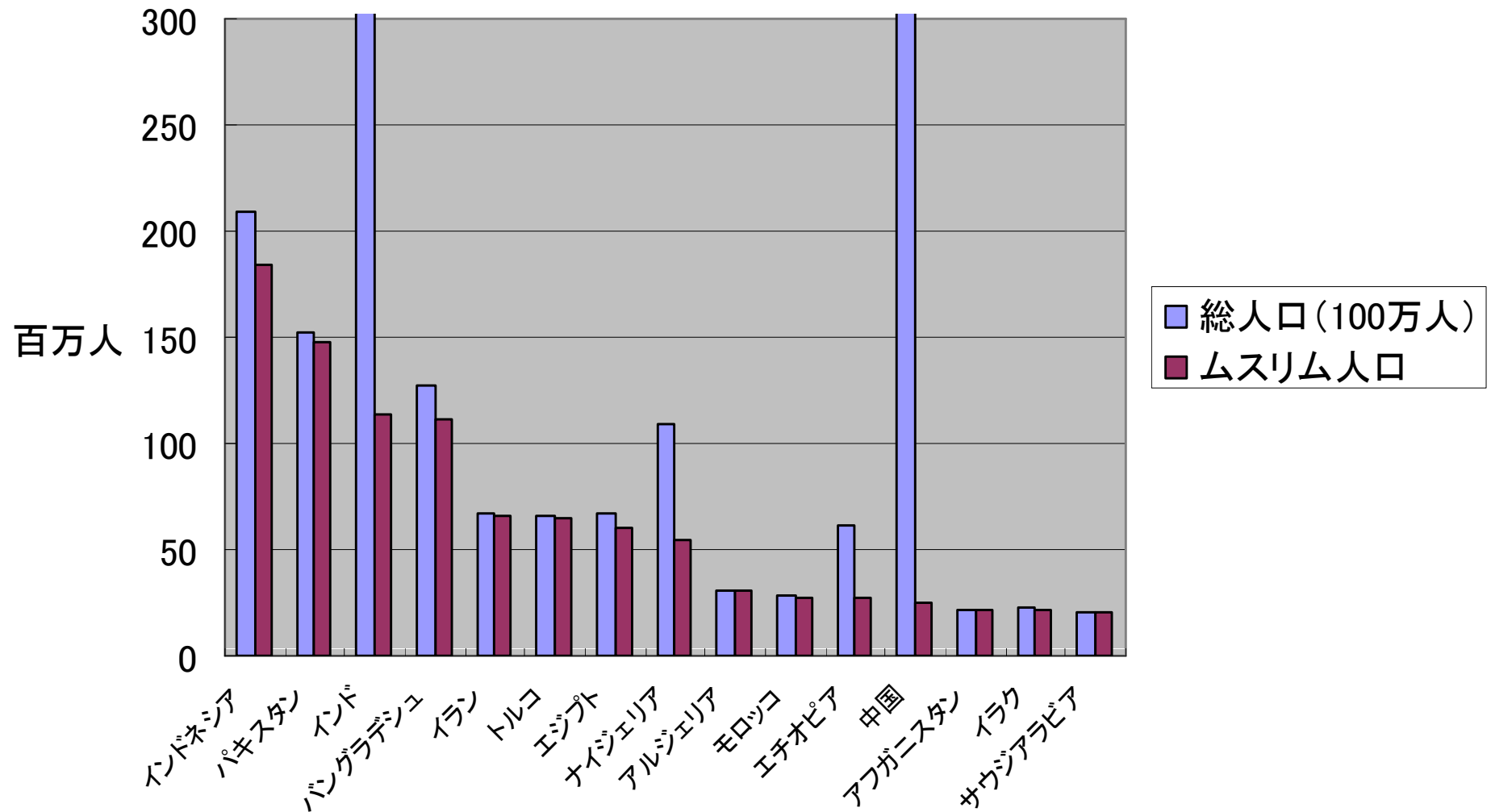
イスラーム教徒の国別人口比



イスラーム諸国会議機構



総人口とムスリム人口



曖昧な「イスラーム世界」

- **地理的な空間だとするとその範囲は？**
 - **イスラーム諸国会議機構？「イスラーム諸国」？**
 - **ムスリム（イスラーム教徒）の多い地域？**
 - **ムスリム全体？**
- **いずれにせよ、社説は「イスラーム世界」を地球上に実在するものとして論じている**
- **なぜこのように曖昧な言葉が、国際政治や日常生活で多用されるのだろうか？**

「イスラーム世界」という語の問題点

- 「イスラーム世界」という枠組みを用いた世界の現状理解と説明には、弊害が大きい。
 - 日本人には不可解な「あちらの」空間として、自分たちの認識の外に置く。触れない、考えない
 - 危ないこと、怖いこと、悪いこと、分からないことは皆「イスラームのせいだ」と言って済ませてしまう ㍻ 「イスラーム研究が必要！」とずっと言い続けている（思考停止状態）
 - 政治的、経済的、文化的にも多様なユーラシアやアフリカの多くの地域を一体と考えることにより、世界情勢を正しく理解できない
- 問題は「イスラーム世界」ではなく、世界の捉え方そのものにあるのではないか（近代的世界観）？

すべては19世紀に始まった！

- 「ヨーロッパ」と「イスラーム世界」概念の形成（近代的
世界観）
 - ヨーロッパヲ 進歩、自由、平等、民主主義、科学、世俗
 - イスラーム世界ヲ 停滞、不自由、不平等、専制、迷妄、宗教
- 自と他を区別する世界観の確立ヲ それを基とする近代諸学問
- それぞれの歴史叙述が始まる
 - 「ヨーロッパ」や「イスラーム世界」の過去の「創造」
 - 1000年に亘る対立、十字軍などの言説
- 歴史が先にあったのではなく、後から歴史が作られる
- 歴史の「創造」による両者の実体化が進む
- 日本では、1930年代に初めて「イスラーム世界」概念が知られるようになる（回教圏）。「東洋」の一部。以後、世界史叙述で常に言及

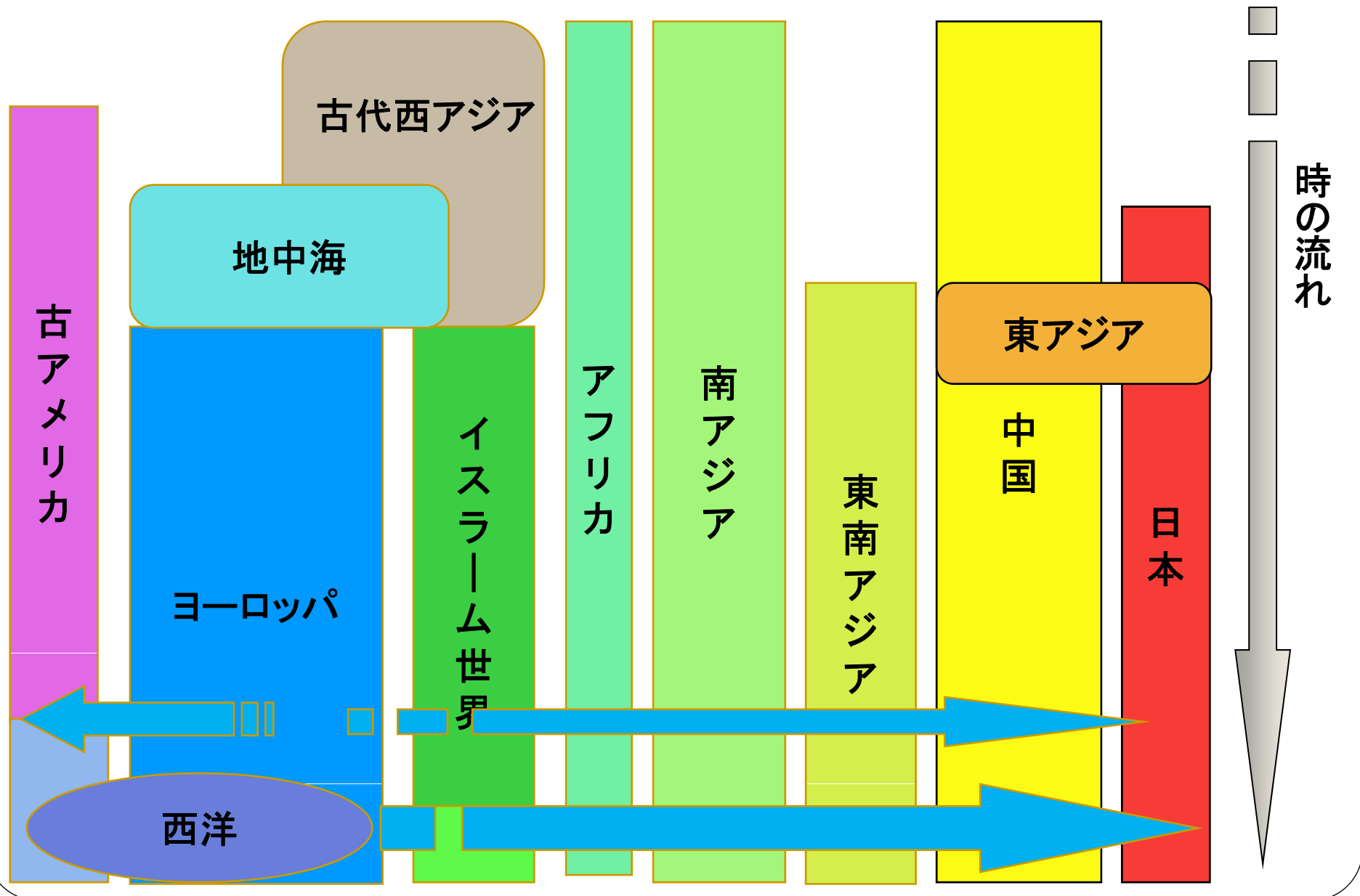
近代的世界観の超克

- 「西洋（世俗）」と「イスラーム世界（宗教）」を二項対立的（こちらとあちら、自と他）に区分してとらえる世界観による限り、「イスラーム世界」は多くの日本人にとって他者として存在
- 人類の共生のためには、この世界観を相対化せねばならない
- 「イスラームとの対話」や「イスラームとどうつきあうか」ではなく、同じ人類としてともに地球の危機にどう対処するかという問題の立て方が必要
- 歴史観の転換によって、この方向へ踏み出せないか？

日本における世界史認識の現状

- 世界には複数の文明が誕生した
- 文明（地域世界）はそれぞれ独自の歴史をたどるが、相互に影響を与え合い、時とともに結びつきを強める
- 16世紀以後の「ヨーロッパ」の世界各地への進出によって、世界の一体化・構造化が進む
- 18-19世紀の「近代」に入って、「ヨーロッパ（西洋、欧米）」文明の優位が決定的となり、その影響が世界全体に及ぶ
- 文明（文化圏）や国ごとに世界を区分し、それらの歴史をたばねたものを「世界史」と考える（相違点を強調する世界史）

現代日本における一般的な世界史理解



現行世界史認識の問題点

- 国や文明の歴史とそれをもとにした世界史の理解は、国によって違い、国や国民同士の対立を生む ∩ 日中、日韓歴史教科書問題。「文明の衝突」
- ヨーロッパ中心史観（「ヨーロッパ」と他を区別する歴史観）が払拭されていない。
- そもそも、「ヨーロッパ」とは何なのか。この概念を無条件で認め、世界史の一部としてその特権的な歴史を描いていてよいのだろうか？ ♪ 「ヨーロッパ」史の虚構性
- 現代日本の歴史認識と世界史は、もはや何かを生み出す役割（概念の実体化）を果たしていない。むしろ日本人の世界観を固定している ♪ 「実学」としての意味の喪失

新しい世界史への希望

- 世界がこれだけグローバル化しているのに、100年前の歴史認識の枠組みで歴史を語っていてよいのだろうか。東洋や西洋、さらには「イスラーム世界」を実体化させ、互いの違いを強調してどうするのか？
- 「**世界は一つ**」という理念を実体化させるような世界史を考えるべきではないか ⇒ 互いの共通点を強調し、世界を一体として描く（共通点を重視する世界史）
- 仲間だと思いと、戦争は起こりにくい（例：明治以後の日本）
- 現代における価値観は、人、国、地域により様々であり、「世界は一つ」が絶対ではないし、それだけでよいとはいえない。重層的な帰属意識の一つとして「地球市民」の意識を涵養する世界史 ⇒ **地球主義の世界史**

地球主義の世界史—二つの方法—

- **環境・生態史の視点に立つ世界史**
 - 環境要因と人間が主語
 - いくつかの画期
 - 人類の誕生と諸大陸への展開
 - 農耕の開始と都市化
 - 「旧世界」と「新世界」の一体化
 - 19世紀以後の近代化（人口爆発と科学技術の発展、大規模開発）

従来の研究を活用する世界史

- 「ヨーロッパ史」と「イスラーム世界史」の脱構築
 - 「ヨーロッパ」という概念（それ自身、啓蒙の世紀以後の「近代的」産物）は必ず他者を必要とする
 - ユーラシアの西方で生じた「史実」を「ヨーロッパ」にこだわらず（もちろん各国史にもこだわらない）、パーツに分解する
- 「中国史」の脱構築
 - ヨーロッパ史と同様の手続き
- 世界を一体と見る視点からのパーツの再解釈・再構成

ユーラシアの近代

- 18-19世紀の世界史をどう描くかが最も重要な課題
- 「ヨーロッパ」史+「アジア」史ではなく、「ユーラシア」史を描くことを試みる
- 一方が「近代」、他方が「前近代」ではなく、全体が時を共有する歴史認識
- 人・モノ・情報（技術、学術、芸術、宗教、思想、衣食住など）の移動、受容、拒絶、融合からこの時代を考える
- 「ユーラシアの近代と新しい世界史叙述」